

日本への船旅

竹本靖秀

1964年10月6日午前8時半、マルセイユの裏町にある安ホテルで目を醒した。1泊15フランというのを10フランに値切った部屋だけあつて、小さな窓が一つしかなく薄汚れたカーテンの隙間から朝の太陽がちよつぱり差込んでいた。

アメリカをふり出しに欧米11カ国をはつつき歩いた一人旅も今日でフィナーレ、数えてみれば日本を離れて4カ月になる。

午前10時にマルセイユ鉄道駅から港の棧橋まで船会社のサービルバスが出るので、時計とにらみつこしながらあわてて外出の用意をした。ホテルを出て鉄道駅までの道すがら朝だというのに商店街は賑わっていた。サンドウィッチ売りの屋台には、労働者風の黒人が数名忙しげに立喰いしている。

マルセイユとも今日でお別れだ、もう二度と訪れることがないかもしれない、いやフランスにだつてヨーロッパのどの国にだつて、再び訪れる機会がないかもしれない……。

こんなことを考えながら往来の人通りを印象深く眺めていると、いつの間にやら鉄道駅の前にやつて来た。

まだバスが停っていない、駅の構内にあるMMフランス郵船会社のサービスステーションに行くと、待合室は人で溢れていた。インド人をはじめ東南アジア系の人達が圧倒的に多い。昨日まで4カ月間というものは白ばかり見なれていた自分にとって、久しぶりに出合う多くの同胞？。黄や黒に一種の安堵感をおぼえた。

日本人がいるかなと思い、待合室を見渡したがそれらしきものは見当たらなかった。もう一度駅前の広場に行き去りゆくマルセイユの街を見た。

南欧特有のエネルギーシユな太陽が東に傾きかけた午後4時過ぎ、清潔な白い装いをしたMMフランス船ベトナム号の乗客の一人となつた。

1万5千トンの巨体は静かに岩壁から離れた、遠い東洋航路の起点にもかかわらず、棧橋の見送り人は少なく日本の出港風景とは対照的というより、何かあつけなさを感ぜさせた。

上甲板には乗船客がいっぱい、人種の品評会のようにいろんな国の人が混っている。私もその一群に入つて離れゆくマルセイユ港に目を向けた、小さなヨットが2隻帆をふくらませていた。

澄みきつた青い紺碧の海、地中海の旅は幼い頃からの憧れであつた。今その地中海の旅が始まつたのである。マルセイユからスペインのバルセロナへ、そしてイタリアのシチリア島の南岸に沿ひ、エジプトのポートサイドまで……。私の身体は熱つていた。

2～30分してはつと辺りを見るともう人影はまばらであつた。上甲板は停泊中以外は3等船客の立入りが禁止されている。客船における等級差別のかなしさである。あわてて2等から3等に通じる廊下を走り抜け船底のルームに戻つた。

331号室、これが今夜から1カ月間の唯一のねぐらになる、2段ベッドが5つ並びわずかな空間を利用して貴重品入れのロッカーと洗面所がとりつけられている。10人合部屋である、顔ぶれはベトナム人2名、スイス人、ドイツ人、インド人が各1名、それに国籍不明（自己紹介のとき言葉が通じなかつたので）のアラブ系が1人と日本人3名、合計9名で私の横のベッドが1つ空いている。日本人はドイツに留学していた東大生Y君と貿易商のNさん。久しぶりに使う日本語で3人共調子づき、荷物の整理も忘れ夢中で語り合つた。

食事は早番と遅番の2回に分かれており、夕食は遅番の7時半からになつてゐる。時間になるとマイクを通じてチャイムがなり、フランス語と英語で知らせてくれる。

夕食の時ベトナム号に乗っている日本人の数が判明した。3等の乗客は約250名、そのうち日本人が男9名、女3名の12名であつた。

10月7日早朝スペインのバルセロナに入港、昨夜の海上は少し風があり船はローリングしていた。やや寝不足気味である、出港の午後11時まで時間がたつぷりあるので街に出ることにした。

男の闘牛、女の舞踊で有名なこのスペインは総人口3,000万のうち1万数千人を除いた全部がカトリック教信者の国である。

闘牛の歴史は古くイベリア半島の原住民が、猛牛を相手に自分の勇気を試したのがそもそものはじまりで、祭りの余興から幾多の変遷のあと、今日のような

プロ闘牛士による興行になったものである。4月から11月のシーズン中は週2回バルセロナでも開催されるが、今日は運悪く休みの日である。

ヨーロッパもスペインまでくるとずい分文化の遅れを感じさせる。道端に紙くずが多く、浮浪者がやたらと目につく。裏町は曲りくねった路地が多く、皮製品を売っている店が雑然と並んでいる。

バルセロナ駅にあるインフォメーションで市内地図を貰い、地下鉄に乗って美術館へ行くことにした。バルセロナの美術館にはピカソの作品が多いと聞いていたので、前から楽しみにしていたところである。蒸し暑い地下鉄の車内では乗客が珍らしそうに私を見ている。

地図をたよりに美術館へ行つたが、入口がビシヤリと締まっている、休館日かなと思ひ念のために美術館前のベンチに坐っている人に尋ねてみた。こうかくといかにも会話が堪能のように聞えるが、実はこの4カ月間の旅行で身についた手ぶり、身ぶりで聞いたわけである。慣れというものは恐ろしいもので、意志は簡単に相手に通じた。

この労働者風の男は「もう閉館だ」という、しかし時計を見てもまだ午後2時前である。不服そうな私の表情を悟った男は美術館の入口にある掲示板に案内し、数字のところを指さした。なるほどちゃんと午前10時から午後1時までと書いてある。

人に見せるための美術館がたつた3時間しか開館しないとはあきれたものだ。そういえばイタリアでもお昼休みが3時間もあり、会社や商店が一せいにシヤッターをおろしていた。どうもラテン系民族はなまけ者らしく、この労働者風の男も長いお昼休みをベンチで過ごしていたものらしい。しかたなくブラブラ歩いていると動物園に出た、動物だけは休み時間がないらしく、入口が開いていたので童心にかえつて見物することにした。そのおかげで日本で見ることの出来ない、アフリカ産の珍らしい動物とお目にかかり、久しぶりにカメラのシヤッターを押しまくった。

ベトナム号は午後11時出港、暗闇の地中海をボートサイドに船首を向けた。

10月8日 晴

左手にシチリア島が見えた、波は静かで船の揺れはほとんど感じない。3等専

用の甲板は船の前部にあり、遊具は何一つない、大平洋をA P Lのウイルソン号で渡ったことがあるが、えらい差である。ウイルソン号ではエコノミー級でもデツキゴルフや卓球台など遊具は勿論のこと、バーや楽団まで用意されていた。それに比べればベトナム号の3等客は貨物同然である。

甲板でうつかり寝転ぶと機械類の油でべつとりと化粧してくれる、それでも船客達は機械類の間を縫って強い太陽で背中を焼いていた。

ベトナム号はフランス船であるから食事におどう酒が出る、朝はパンとコーヒだけであるが、昼食と夕食の時にはおどう酒は飲み放題である。一応スूपからデザートまでワンコース運ばれてくるが、どうも味はいただけない。しかし船旅では食事の時間が何よりの楽しみである。

10月9日

1日中荷物の整理で費やす、甲板に出ると昨日より気温が高くなっており、人影も少なくなっている。夜、食堂で映画会がある、雨の入ったフィルムで余り面白くない。

10月10日

今日は東京オリンピックの開会日である、日本にいる友人達はテレビにしがみついていることだろう。

食堂で同じテーブルに坐っているイギリス人の女性も関心があるらしく、われわれの話に仲間入りしてくる。この女性はインドのボンベイまで行くもので、学校の先生だという。何か社会福祉の関係を勉強しているらしく、当分はインドに滞在するという。明日はポートサイド着早く寝ることにした。

10月11日

午後2時半スエズ運河の入口にあるポートサイドに入港、原始的な帆をはつた漁船がいつぱい群がっている。棧橋がなく浮きを代用した樽を並べ、その上に板を打ちつけたイカダが岸壁から本船までつながれた、役人らしい口髪をたくわえた2人が乗り込み1等ロビーのテーブルに坐つた。船内アナウンスで上陸を希望するものは、パスポートを持って1等ロビーに集まれという。早速Y君

ら日本人数名とロビーに行つたが、口髪の親父はなかなか受付を開始しない。後を振りかえると4～50人が列をつくっている、30分程してやつとパスポートを集めスタンプを押し出した。目ばかりギョロギョロさせ、口髪の間からタバコの煙をふきながら何やらわけのわからんことを喋っていたが、こちらも黙っていると無言で上陸カードをくれた。

腹立たしくなるほどのんびりした上陸手続きを済まし、樽で作った浮き桟橋にでると本船の周りには伝馬船が5、6艘近づいていた。その伝馬船には10才位の子供が数名ずつ乗っており、甲板に向つてギヤアギヤア叫んでいた。

この子供達は甲板にいる乗客の投げた硬貨を、海にもぐつて拾うもので数年前南太平洋の島を紹介した映画に、観光客が面白がつて硬貨を海に投げこんでいた風景とまったく同じである。「フランチ・マネー」「イングリツシユ・マネー」と子供達は口々に自分の欲しい硬貨の名を口にしながら、潜つては拾い、潜つては拾い、ピストン運転を行なっている。

それに驚いたことには櫓を漕いでいるのは立派な大人で、まるで子供達は鵜飼の「う」である。さしずめ日本ならこの大人野郎は、児童福祉法違反で逮捕されるところである。人類文明の発祥地エジプトの第1印象がこれでは何かわびしさを感じる。

しかしこれだけで驚くのはまだ早かつた、税関を抜けて2、3分も歩かないうちにどこからともなくパラパラと数名の子供が集まつてきた。そして手をさしのばしながら金をくれとついてくる。しばらく歩くと市内の中心部と思われる交差点に出た、映画「アラビヤのロレンス」に登場したような目の鋭い巡査が交通整理のために立っている。だが交通整理とは名ばかりで人や車は完全に信号を無視している。交差点を斜めに横断する人がいてもこの巡査は知らぬ顔。こんなところで交通事故に会うとやられ損になること間違いない、注意しながら交差点を渡つた。

なんだか騒々しくなつたので、ふとうしろを振り返り仰天した。5、60人の子供が各々手を出しながらついてくるのである。中には私のズボンのポケットに手を入れようとしているものもいる。思はず日本語で「コラッ」と怒鳴つた、すると子供達は「コラ・コラ・コラ」と真似ながら調子を合わせてしつこくつきまとう。もうこうなればお手上げである、勝手にしやがれと思いポケツ

トだけは両手で押さえ市内を見物することにした。

市場に出た果物や野菜など屋台や地面に広げて売っている。人々は全部パジャマのような服を着ている白い上衣はダランとたらしほとんどが裸足である。粉を煉つて薄平たいパンを焼いている店、自転車屋、肉屋とどつたがえしている。食べ物の上にはハエが真黒にたかつており、買いもの客はそれを手で払い除けながら品定めしている。うしろをついてくる子供達の数に相変らず減つていない。

約1時間市内をぶらつくとも暑さでくたくたになる、道路端にテーブルを出した喫茶店のような店があつたので入ることにした。一番安心して飲めるのはコココーラ、このコココーラと日本のソニー製品だけはどこの国へ行つても目につく。完全に世界を制覇してい。隣の席では中年の男がバケツのようなものをテーブルの前に置き、細いホースを口にくわえながら、物珍らしそうに私の顔を眺めている。5分、10分……眉一つ動かさずあきもせずこちらをみている。私も負けずに相手を観察した、この男のくわえているのが本にかいてあつた水タバコなのだ。

日中に見物はこのくらいで切り上げないと暑さにまいつてしまうと思い、再び船に戻ることにした。建物のあちこちにナセル大統領のポスターが貼つてある。この国の全てがナセル、ナセルで終始しているように思われた。

子供達は結局最後まで離れずにずっとついてきた、税関のゲートでやつと解放され船のタラップに足をかけた。振り返ると子供達はまだ私の姿を追っている。こんどはなんだか愛らしくなつてきた。

土産品は日が暮れてから買いに行くことにした、ラクダの皮製品など少し買ったかつたので、冷房のきいた部屋でベットにもぐりこみながら手持ちの残り少なくなつたドルを数えた。

午後11時30分ポートサイド出港。

10月12日

スエズ運河の運航は静かであつた。温度計は目に見えて上昇する。ジリジリと焼けつく太陽で運河の水が全部蒸発するのではないかと錯覚がおこる。

ものの10分も暑くて甲板に立つておれない、それでも砂漠を見るため頭にタ

オルを巻きながら甲板に頑張る。本船と運河の兩岸とはそれぞれ約50m程離れている。岸の向こうは一面の砂漠だ。

昼過ぎ運河の底から土を掘っている船団に出会った。どこの国の船かと国旗を見ると「白地に赤く日の丸そめて」の唱歌の如く、まぎれもなく日章旗である。思わず「ヤッホー」と叫んだ。船が近づくにつれて文字もはつきり見えてきた。水間組と船腹に大きく書かれてある、ここ数年来水深8mであつたスエズ運河の底が浅くなつてきたため、その底掘り作業に日本の技術が導入されているわけである。

午後4時、スエズ着ここより紅海に入る、紅海というから海水の色が違うのかなと思つていたがまったく大洋と同じである。地図で見ると細長いが、兩岸など見えるわけもなく広々とした青紺の海である。

10月13日

今夜8時から食堂で演芸会が開催される、各国の代表が歌や踊りを披露するもので、わが日本軍も参加しなければならない。インド人などは7、80名も居るから歌の上手な者だけ選べるが、日本人の場合男女合わせて12名しかいない。日本人客最年長の上智大学S先生をリーダー格に、民謡を全員で合唱することにした、朝から練習にとりかかった。

夕食後各国の世話人がテーブルを片づけ、壁には参加国の国旗が貼られた。準備も終わり司会者にはドイツに留学していたという白人と混血のインド人青年が推薦され、演芸会の幕が開いた。船員も観客の後方から顔を見せている。

スイス人のヨーデル、パキスタン人のタイコ、イギリス人の寸劇などつぎつぎとお国自慢がとび出しよいよ日本の順登がまわつてきた。

「会津磐梯山」「隅田川」の2曲をS先生の指揮で混声合唱、場内いつぱいの拍手に気をよくしたわれわれは、アンコールに「スキヤキ」を披露した。

10月14日

さぎ波一つない今日の紅海はまるで鏡のようである、風もなくただ本本船のみが動いている。不気味な動と静、時々飛魚のすばらしい乱舞が見られ、退

屈な気持が安らぐ。全員ねむり病にかかったように船室のベットにもぐりこみ甲板に出てこない、気温はますます高くなる。

10月15日

朝9時、アデン着。まばゆい強烈な光線はサングラス無しでは外に出られない。アデンはハゲ山のふもとにへばりつくように簡素な家並みを見せた街である。サウジアラビアの一角に位置し、香港と同じイギリスの植民地である。自由貿易港とあつて日本のカメラやラジオが商店のウインドに誇らしげに陳列されている、値段も安くインドやセイロンで下船する乗客はここで土産品を買い求める。

街は熱気がいつぱい、道路はお好み焼の鉄板のように焼けついている、トヨベツトコロナが走っている。午後4時出港。

10月16日

波はおだやかで気温が除々に下がってくる、インド人のほとんどが日本製のトランジスターラジオをぶらさげ、ガーガー鳴らしながら得意気に甲板を右往左往している実にやかましい。

甲板のあちこちでわれらの同胞日本人がインド人につかまつている。アデンで買ったラジオや、カメラの使用法を聞いているのである。中には鳴らなくなつた中古ラジオを持つてくるものも現われた。ボンベイに着くまでの4日間どうやらこのインド人達に追いかけられそうである。

ベトナム号は静かに揺れながらアラビア海を一路、インドに向けスピードを上げていた。

— 完 —

クラブにおける探検理論と実践

和田 徳之

探検とは？

これは味わい深い言葉ではなかろうか。実際問題として考えて見ると厄介な言